

# 韓国における日本近世古典人文学資料の 翻訳出版および研究動向

鄭 滢

## はじめに

韓日の文化交流において、翻訳の重要性はいまさら強調する必要もなく、これまで韓日の文化や歴史を理解するための手段として大きな役割を果たしてきた。韓国における日本関連作品の翻訳出版は、その大部分が文学や思想と歴史のある一分野に限定された研究報告だったと言える。日本の近世文学の場合、完訳本の出版数は一桁をようやく超える程度であるため、近世文学に限定せず、古典文学と近世人文学における翻訳の現況を報告する必要性がある。

本稿では、翻訳と研究に大きく分け、日本近世文学の翻訳と、歴史・思想など他の人文学に関する学術書の翻訳の現況を分析し、さらに修士・博士学位論文および学術誌論文の刊行現況の分析を通して韓国における日本近世期研究の現況と展望を明らかにしたい。

## 1. 一次資料を活字化した書籍の所蔵現況

日本近世期の文学作品を含む人文学分野の一次資料を活字化した書籍の目録を調査した。調査は、教育科学技術部の出資機関である韓国教育学術情報院(KERIS)のウェブサイトの「所蔵機関」欄を通して行った。その結果、所蔵書籍は全部で253種あり、そのうち文学は111種、思想は98種で両分野が圧倒的に多い。大半の資料が分布している所蔵機関はソウル大学校と国立中央図書館である。ソウル大学校の場合、所蔵総数157種のうち126種が、国立中央図書館の場合、所蔵総数115種のうち98種が、1945年以前に出版されている。既刊の分野別順位をみると、日本思想に関連する書籍は78種で最も多いことが分かる。

全体的に文学が111種、日本思想が98種であるという点を考慮すれば、解放以前に日本思想関連の書籍が集中的に入ってきて、ソウル大学校(旧、京城帝国大学)と国立中央図書館(旧、朝鮮総督府図書館の蔵書を継承)に所蔵さ

れたことが明らかになる。解放後、韓国外国語大学校および高麗大学校においては、日本語日本文学関連学科のために、日本の文学や語学の書籍が多く輸入されてきている。

## 2. 日本古典文学作品と近世関連学術書翻訳の現況

韓国における日本古典文学作品の翻訳、古典文学研究書の翻訳、近世関連学術書の著述、近世関連学術書の翻訳について調査を行った。

### (1) 古典文学作品の翻訳

時代別の翻訳作品と年度別の翻訳数の推移は次のとおりである。

【表】 古典文学作品翻訳の現況

時代	ジャンル	作品名
上代	史書	古事記（6種）、日本書紀（2種）、續日本紀
	歌謡、漢詩集	万葉集、懷風藻
	地誌	風土記
中古	物語	源氏物語（6種）、伊勢物語、堤中納言物語、落窪物語
	随筆、散文集	枕草子（2種）、紀貫之散文集
	和歌	古今和歌集
	日記	蜻蛉日記（2種）、紫式部日記
	説話	三宝絵、日本霊異記
中世	随筆	徒然草（4種）、方丈記、混合
	説話	癸心集、沙石集
	物語	平家物語（2種）、御伽草子
	能狂言	風姿花伝（3種）、狂言集
	史書	新皇正統記、元享釈書
	仏教書	歎異抄
	その他	南方録、古今集仮名序、毎月抄、歌意考
近世	小説	伽婢子、日本永代蔵、好色一代男、東海道中膝栗毛、雨月物語、春雨物語、春色梅児誉美、新御伽婢子、西鶴置土産
	俳諧	芭蕉（8種）、一茶、蕪村、奥の細道（2種）
	浄瑠璃	曾根崎心中、仮名手本忠臣蔵
	伝説、民話	遺老説伝
	教訓書	養生訓
	兵法書	五輪書
	注釈書	紫文要領
	思想	初山踏、靈の真柱、論語徴
随筆	たわれ草	

芭蕉（紀行文含む10種）、『源氏物語』（6種）、『古事記』（6種）、『徒然草』（4種）という順に多く翻訳されている。上記のリスト以外にも、『今昔物語集』『愚管抄』『和泉式部日記』『読史余論』『とはずがたり』『夢中問答』『海国兵談』『世事見聞録』などは、韓国研究財団の名著翻訳支援事業によって翻訳が進行中であり、文学研究者が思想や歴史分野の翻訳にも手を染め始めている点は特筆すべきである。翻訳対象は、文学の場合、韓中日の比較ができるテキストが中心になっており、それ以外は、各時代の歴史・社会・文化・思想と関連のある書籍が主に翻訳されている。名著翻訳支援事業において、近世関連資料が翻訳の多数を占めていることから、日本近世資料への需要が大きいことが推測できる。

また、古典文学翻訳出版の時代別推移については、1990年代後半から翻訳書が多く出版されているのが分かる。その要因として、留学生の帰国と韓国研究財団の名著翻訳支援事業、高麗大学校日本研究センターの翻訳成果、チマンジ（知識を作る知識出版社）のシリーズなどが考えられる。

## (2) 近世関連学術書の著述・翻訳の現況

韓国国内で刊行された近世関連学術書の著述を分野別にみると、文学分野が25冊（仮名草子、浮世草子、見立て、俳諧、読本、戯作、浄瑠璃、朝鮮通信使など）、歴史分野が70冊（近世歴史一般、通信使関連、近世韓日城郭比較、都市比較、交流史、侍、壬辰倭乱、明治維新、韓日関係史、独島）、思想分野が20冊（征韓論、朝鮮認識、日本認識、朱子学、伊藤仁齋、山崎闇齋、荻生徂徠、本居宣長、武士道、思想一般）、芸術分野が20冊（浮世絵、文楽、歌舞伎、落語、演劇一般）となっている。語学では『捷解新語』関連の著書が多数ある。

一方、近世関連学術書の翻訳現況をみると、歴史分野が35冊（韓日関係史、朝鮮通信使、雨森芳洲、豊臣秀吉、徳川家康、新撰組など）、思想分野が35冊（思想史一般、武士道、朱子学など）で、他の分野に比べて多数翻訳されている。

2000年以降、著述は約120冊以上、翻訳は約70冊以上が刊行され、急増の傾向がみられる。歴史分野においては、近世期朝鮮と日本の関係史についての学術書などが多く刊行されている。通信使、壬辰倭乱と関連する著書は継続的に刊行されており、それ以外に博士学位論文の刊行、大学の教材を目的とした概論的な著書の出版が多数行われた。翻訳においても学術書と同じく、1980年代から90年代中盤までは通信使関連書籍と韓日関係史分野の学術書の翻訳が

主に行われており、2000年代に入ってからには武士道や朱子学など、思想分野の学術書の翻訳が多いという特徴が見られる。

### 3. 修士・博士学位取得者の専攻分布と内容

近世文学に限定し、韓国人研究者の修士・博士学位論文のテーマおよび年度別推移について調査した。分析の対象は、修士（韓）313編、博士（韓）48編、博士（日）57編の、合計418編であり、韓国研究財団の研究者情報検索システム（KRI）、および韓国教育学術情報院（KERIS）で目録を収集した。

韓国で取得した修士・博士学位の専攻分野においては、日本文学が圧倒的に多い。そのうち、近世文学学位取得者の専攻内容については、芭蕉を中心とした俳諧の研究が最も多い。これについては様々な理由が考えられる。一つは、俳諧は複雑な形式ではなく、短詩型であるため理解しやすいこと、二つ目としては、日本語と韓国語に共通する言語学的特徴により、17音で表された俳諧を理解し、楽しむことができることなどが挙げられよう。また、博士学位取得者の専攻の年度別推移をみると、日本文学は年度に関係なく最も多く、2000年代に入って以降、文学に限らず歴史・芸術・思想など多方面にわたって研究者が輩出し始めている。また、韓国との比較を通して日本の歴史・芸術・思想を把握しようとする論文が多い。例えば、歴史分野の博士学位取得者の場合、壬辰倭乱や朝鮮通信使など、韓日関係史の視点から執筆された論文が圧倒的に多い。また、芸術・思想関連の学位論文においても、朝鮮との比較が最も多い。一方、日本への留学生の場合をみると、芭蕉・近松・西鶴・秋成のような主要作家の作品に関する研究よりも、他の研究で博士の学位を取得している例が多い。

上記の表では時代別研究傾向の推移は省略したが、近年、日本文学に関するテーマよりも、朝鮮通信使、壬辰倭乱、『金鰲新話』との比較など、韓国と関連づけた研究が増えている。また、2000年代に入ってから、修士論文においても有名作家や注釈書の備わる作品に限らず、様々なテーマを取り上げた学位論文が増えている。

#### 4. 日本近世期人文学研究の現況と展望

ここでは、韓国における日本近世期人文学研究の現況を把握するため、1945年の解放以後<sup>1</sup>、韓日国交正常化が実現した1965年から2012年5月<sup>2</sup>までの47年間におよぶ日本近世期人文学全般（文学・歴史・思想・文化・民俗・芸術・宗教・語学・政治・経済・経営・教育など）に関する学術研究業績の現況を調査した。

調査は、韓国教育学術情報院（KERIS）の検索サイトを利用し、韓国国内で発表された学術誌論文を対象とした。その結果、1967年から2012年5月まで韓国において発表された日本に関する学術論文の中で、近世期関連論文は1,722編あり、研究者数は640余名に達した。この資料を基に、韓国における日本近世期研究が今までどのように進められてきたか、そしてどのような特徴が見られるかについて、次のように考察する。

##### (1) 近世日本に関する学術論文数と研究者数の現況

1994年までは年度別論文数と研究者数が同じような上昇幅を示しているが、1995年からは研究者数よりも論文数が大きく上回り始め、2002年以後、論文数と研究者数の比率の上昇幅が大きくなったことが分かる。原因としては、日本留学世代の帰国時期と韓国国内での研究活動時期が重なっていることが考えられる。

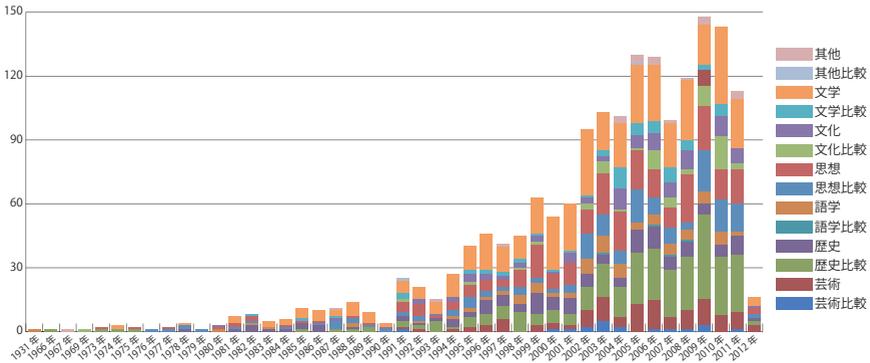
次に、韓国における人文学関連支援事業と日本関連学会の増加を挙げることができる。韓国研究財団では学術誌の質的水準向上を図るため、毎年、学術誌の研究業績を評価し、登載学術誌と登載候補学術誌<sup>3</sup>を選定する事業を行っており、人文学分野においては1999年以降、韓国研究財団選定登載および登載候補学術誌が大きく増加したことが、一つの要因として作用したことが分かる。

- 
- 1 1945年解放以前に韓国で発表された近世期に関する論文を10編ほど調査したが、ここでは対象外とした。
  - 2 韓国教育学術情報院の該当サイトにおいて、学術論文のアップロードが遅れていることを勘案し、5月までに掲載された実際のデータ収集には至らないことを断っておきたい。
  - 3 韓国研究財団選定登載および登載候補学術誌とは、韓国国内の研究所と学会で発行する学術誌中、韓国研究財団の学術評価に申請し、登載学術誌と登載候補学術誌に選定された学術誌をいう。2012年現在、韓国研究財団が選定した日本学関連登載学術誌と登載候補学術誌は20余種におよぶ。

## (2) 研究成果およびテーマの分析

韓国で発表された日本近世期学術論文のデータを、研究者の専攻分野および主題別分野ごとに分類してみると、最も多くの分野を占めているのは、文学（文学比較を含む）関連の 568 編、歴史（歴史比較を含む）関連の 422 編、思想（思想比較を含む）関連の 408 編で、三つの専攻分野が中心をなしていることが分かる。

【図】学術論文の研究主題分析



ところが、上のグラフに見られるように、1990年代後半に大きな増加を示しながら、研究対象分野が時代の推移とともに、芸術・民俗文化・宗教・語学・社会・政治・経営などに多様化していることが確認できる。

注目すべきことは、日本研究だけでなく、日韓の比較考察が活発になされている点である。合計 1,722 編の中で、比較考察を行った論文は 598 編を占め、全体の三分之一に近い比重を示している。最も多いのは歴史分野の比較考察である。例えば、歴史関連論文全体の 422 編の中で、日本史に関する論文は 131 編で、韓日関係史に関わる論文は 291 編に達している。内容は、壬辰倭乱と朝鮮通信使をめぐる韓日両国の外交史と歴史認識に関する研究が大部分を占めている。韓国の日本史研究者は、日本の研究者による膨大な実証的研究を踏襲するよりも、日本における現在までの研究で欠落した領域において日本研究の意義を求めようとする傾向がある。例えば、韓日の古代史問題、中世以来の日本支配層の世界観に朝鮮を欠落させてきた認識のメカニズム、朝鮮通信使の研究、

近世以後の朝鮮侵略、近代植民地の歴史をめぐる詳細な研究、植民地近代化論争、植民地化韓国責任論、韓日交流あるいは韓日文化の比較研究などが挙げられる。誤った過去の歴史を真摯に反省しつつも、過去にのみとられることなく、未来志向の両国関係を構築していくための韓日研究者間の連帯が活性化されなければならない時期に来ている。

他に、両国の近世期思想の比較考察と、文学や民俗文化の比較研究が活発になされていることを指摘することができる。また、2000年以後は韓国と日本だけではなく、中国をも視野に入れて、東アジア文化圏から考察しようとする論文が多数確認できたことも注目される。

さらに、人文社会科学の研究者の共同研究が拡大し、他分野との学際的研究が試みられていることは、今後の韓国の人文学研究に積極的な方向を示唆していると言える。

## おわりに

以上、韓国における日本近世古典人文学資料の翻訳出版および研究の動向を探ってみた。翻訳出版においては、2000年代に入って古典文学作品の翻訳と近世関連著訳書などが急増していることが確認される。まず、日本の古典文学作品の翻訳が多く行われるようになり、韓国において日本の古典文学作品の読者層が拡大していること、日本文化の原型と考えられるものを日本の古典文学作品の中から探り出そうとする動きが活発になっていることなどが指摘できる。特に、修士・博士学位取得者の中から日本文学の研究者が多く輩出し、その研究成果が日本文学作品の翻訳出版に繋がっていると言える。

近世期学術書籍に関しては、韓日関係史を中心として、文化・思想・社会など多様な分野にわたって翻訳が行われたことから、韓国の日本研究者たちの研究領域が有機的に連携し始めるようになったことが推測できよう。さらに、韓国での近世期日本研究では、研究テーマが多様化していることと、両国の思想・文学や民俗文化の活発な比較研究がなされていることが注目される。最後に、21世紀に入ってからは、韓国と日本だけではなく、中国をも視野に入れて、東アジアという一つの共同文化圏の中から日本を認識しようとする傾向にあることが確認できる。

## 付記

小稿は、国際日本文化研究センター共同研究会「日本仏教の比較思想的研究」(2013年5月11日、於国際日本文化研究センター第3共同研究室)での口頭発表に基づく。席上でご意見賜った諸氏に御礼申し上げます。

なお、小稿には、染谷智幸・崔官編『日本近世文学と朝鮮』(勉誠社、2013年)に掲載した論文の一部も含まれている。